

学校の様子（10/16～21）

10/16（月）後期児童会任命式・児童会役員交代式

本日、朝会で後期児童会役員の名刺を授けました。後期児童会役員は、任命状を受け取る時、表情がとてもやる気に満ちあふれていました。

その後、前期児童会役員が登場し、一人一人が全校児童に向けてメッセージを伝えました。最後に、前期児童会長の野口くんから「新役員のみなさん、市が洞小を盛り上げていってください」と後期児童会役員にエールを送りました。それを受けて、後期児童会長矢藤くんから、「これからの市が洞小学校は、僕たちが引っ張っていきます」という言葉が聞かれました。

前期児童会役員のみなさん、本当にありがとうございました。後期児童会役員のみなさん、期待しています。



10/17（火）交流遊び

今日のいちータイムに、交流委員会主催の交流遊びが行われました。内容は、「手つなぎリレー」を行いました。1チーム20人ぐらいが手をつなぎ、手を広げてできたスペースを手を離さずに通り抜けるリレーです。子どもたちは、手を離さないようにしながら、できるだけ早くくぐろうと一生懸命がんばっていました。みんなで力を合わせて行うこのリレーをとっても楽しんでいました。



10/21（土）長久手市社会福祉大会

本日、長久手市福祉の家で第32回長久手市社会福祉大会が行われました。この大会は、「福祉のまち 長久手」の実現に向け、心をひとつにするために行われています。福祉体験作文の発表では、各小中学校から1名ずつ発表しました。本校では、大野巧翔さんが「福祉についてぼくたちが考えること」という題で発表しました。内容は下の通りです。この発表を全校でも聞く機会を作り、福祉について改めて考えるよい機会としたいと思います。

「福祉についてぼくたちが考えること」

市が洞小学校 大野 巧翔

これは、ぼくが5年生のときのことです。ぼくが友だちと遊びに行った帰りのバスで、おじいさんとおばあさんが乗ってきました。しかし、席は満席で、優先席も他の高齢者でいっぱいでした。おじいさんとおばあさんは困ったような顔をしていました。そこで、ぼくは、ふと学校であった福祉実践教室のことを思い出しました。そして、おばあさんに席を譲りました。すると、今度は友だちがそれを見て、席を譲ってあげていたのです。おじいさんとおばあさんは喜んで、あめをくれました。

福祉実践教室では、ぼくは、高齢者疑似体験に参加しました。この高齢者疑似体験は、自分が高齢者になりきって、身をもって高齢者の大変さを知ろうという体験でした。ぼくは、最初、高齢者疑似体験はどんな体験をするのか見当もつきませんでした。行ってみると、それは高齢者の方の生活を実際に体感することができる道具を身につけて、体を動かしてみようというものでした。体力の衰えを感じるおもりや、視界をふさがれるゴーグルを身につけて、歩きにくくなるくつをはき、関節を固定しました。そして、階段を上り下りしました。視界がふさがれていて、前がよく見えず、ひじやひざの関節が固定されていたため、よくつまずいて転びそうになりました。下りも目がよく見えないので、足を置く位置が分からず、階段を転げ落ちそうになり、大変な思いをしました。すべての高齢者とは限りませんが、たくさん的高齢者が、毎日つらい思いをしていたんだなと思いました。この体験から、バスで会った高齢者に席をゆずってあげることができました。

また、ぼくは、自分の祖父に申し訳ない気持ちで一杯になりました。祖父は高齢ですが、毎日ぼくの散らかしたものを片付けてくれたり、ご飯を作るなど家事をしてくれたりしています。「祖父は普段は元気だけど、もしかしたら苦労していたかも。」と思うと、くやしい気持ちで一杯になりました。「なんで今までもっと親切にしてあげなかったんだろう。」と思いました。ぼくは、ここで高齢者に親切にする思いやりの心をもって行動することが、「福祉」の一つではないかと考えました。その日から、自分で片付けるものは片付け、家事も手伝うようにしてきました。さらに、テレビも祖父が見たい番組を優先して見てもらうようにしました。また、祖父がさびしい思いをしないように、学校や習い事などの出来事を話してあげるようにしました。こういう思いやりや親切の一つ一つが「福祉」につながると思い、ぼくは、自分でできる身近な活動から始めました。

福祉実践教室は、ぼくにとって「福祉」について考えるきっかけとなりました。そして、学んだことを生かし、高齢者の方々に対してよい接し方ができるようになったと思います。ぼくは、人に対する思いやりや親切が、「福祉」にとって大切なことだと思いました。

ぼくが、今の社会を見て思うことは、こうした思いやりや親切がもっともっと全世界にまで広がっていくことが必要なのではないかとということです。社会の中では、高齢者は、まだ生活しづらくつらい思いをしている人たちが多くいます。ぼくが、福祉実践教室をきっかけとして学び、祖父やバスの中で出会った高齢者に優しく接することができるようになったように、一人でも多くの人に思いやりや親切に気づいてもらい、高齢者にとっても生活しやすい社会になってほしいと願っています。多くの人々が、「福祉」について理解してくれることにより、今後の社会はよりよいものになると思います。「福祉」が広がっていくことを、ぼくは願っています。